

目標・指導・評価の一体化を図り、 未来の学習につながる評価の実現を

新学習指導要領の全面实施を控え、「主体的・対話的で深い学び」の視点での指導改善が期待される中、教育委員会や学校は、学習評価についてどのような意識を持ち、次年度に向けてどういった準備が必要になるのか。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「児童生徒の学習評価に関するワーキンググループ」の委員を務めた研究者と、教育委員会、学校長の3人が語り合った。



京都大学大学院 教育学研究科 准教授

石井英真 いしい・てるまさ

専門は教育方法学。中央教育審議会「児童生徒の学習評価に関するワーキンググループ」委員。主著に『小学校 新指導要領改訂のポイント』（共著、日本標準）等。

千葉県教育庁

教育振興部学習指導課学力向上室 主幹

梅津健志 うめづ・たけし

千葉県公立小学校で教諭を務めた後、柏市教育委員会学校教育部指導課課長、柏市立酒井根東小学校校長等を経て、現職。

茨城県 ^{こが}古河市立総和南中学校
校長

森田泰司 もりた・やすし

古河市の公立小・中学校の校長を歴任。古河市教育委員会参事、独立行政法人教員研修センター主任指導主事等を経て、現職。

目標・指導・評価の一体化

子どもの姿で目標を捉えて その目標を評価対象に

——小学校新学習指導要領の全面实施を控えた現場の状況をお教え下さい。

梅津 多くの学校が新学習指導要領の趣旨を踏まえて指導改善を進めていますが、「資質・能力」や「見方・考え方」の理解がまだ十分でない教員が見られます（図1）。また、観点別学習状況評価（以下、観点別評価）が3観点になることは知っていても、なぜそうなるのかを理解せずに、用語だけを見比べて、「現行の4観点評価と

変わらない」と捉える教員もいます。教育委員会としては、学習評価の趣旨を周知するとともに、資質・能力への理解がさらに深まるよう、教員をいかに支援するかが課題です。

森田 ここ数年で若手教員の割合が増えたことも、学習評価のあり方への理解が深まらない一因です。指導経験の浅い教員は、主体的・対話的で深い学びの実践に精いっぱい、育成した資質・能力をどう評価すればよいかにまで考えが至っていません。

石井 評価のあるべき姿は、授業・単元・教科において目標に掲げた「子どもに身につけてほしいこと」を、

そのまま評価の対象とすることです。よく、「指導と評価の一体化」と言われますが、「目標と指導と評価の一体化」こそが重要です。

森田 「何を評価すればよいのか」と難しく考えすぎず、掲げた目標に到達したかを確認するということです。ただ、特に若手教員には、自身が掲げた授業の目標と、子どもが取り組む学習活動との間にずれがある場合が見られます。そのため、最後のまとめや振り返りが、教員が立てた授業の目標と一致しない授業になってしまうのです。

石井 その原因は、目標を子どもの姿

図1 「知の構造」を用いた教科内容の構造化

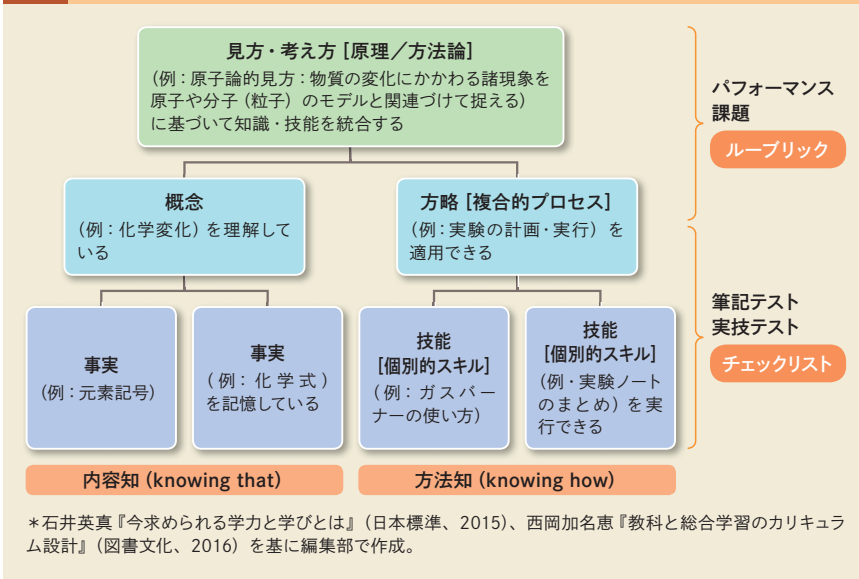
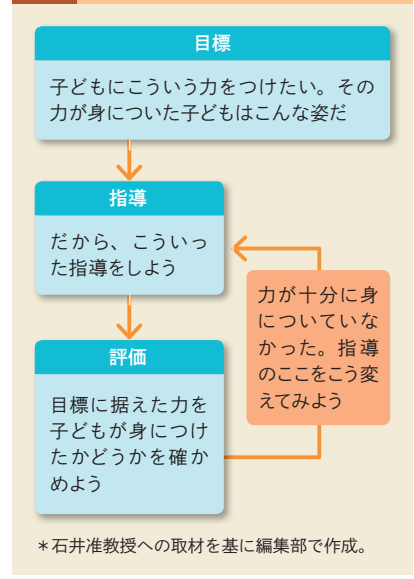


図2 目標・指導・評価の一体化



で捉えられていないからではないでしょうか。単に「○○力」を目標にするのではなく、その力が身についている子どもとはどんな姿なのかを、具体的に思い描くことが重要です。例えば、体育の跳び箱の授業であれば、どのように跳んだら「跳べた」といえるかをイメージしておきます。それができれば、おのずと評価規準を設定でき、どのように指導したらその姿が表れるのかを考えることで、評価方法も絞り込むことができます(図2)。

子どもが成長した姿は何か その姿を捉えられているか

石井 すべての教員が、子どもの姿を具体化して目標とすることは、容易ではありません。例えば、引き算の評価で、「引き算の概念を理解している」とはどんな姿かを具体的に考えてみると、繰り下がり引き算の問題が不正解だった時に、単に「計算ができていない」と捉えるか、つまづきを見取って「引けないところを無視している」と誤答の要因を捉えられるかは、教員の力量にかかってきます。そうした見極めを一部の教員の経験のみに頼らず、どの教員

も見るべき視点を押さえられるよう、目標の枠組みを示して共通理解を図るとよいでしょう(P.5 図4)。

梅津 子どもを見る目を養うためには、複数の教員が単元で目指す子どもの姿を話し合い、指導案を作るといった研修が考えられます。その授業と学習評価を実際に行えば、目標・指導・評価の一体化を実感できます。

石井 目標設定には教材研究が欠かせませんが、ここでも「この問題はここでつまづきやすい」など、教材を子ども目線で捉えることがポイントです。教科書を教えるのではなく、教科書で何を教えるのか。子どもの姿が見えていると過信せず、子どもが成長した姿とは何か、自分はその姿を捉えられているかを常に問い続けることが重要です。

評価方法のあり方

学びを総合化して取り組む「見せ場」のある評価課題を

森田 これまでは主に客観テストの得点を基準に評価してきたため、表面に出にくい資質・能力の評価をどのように行うかは大きな課題です。

石井 観点別評価の目的は、単元・教

科ごとに子どもの成長を見取り、ペーパーテストなどの客観テスト以外にも多様な方法を用いて評価し、教員の指導改善や子どもの学習改善に役立てることで。評価方法は、大学で行われている形態がヒントになると思います。大学では、評価対象に応じた方法を複数組み合わせるのが一般的です。例えば、テストで知識・技能、レポートで思考力・判断力・表現力、コメントシートで関心・意欲・態度を評価し、「テスト40%、レポート50%、コメントシート10%」など、科目の目標に応じた比率にします。

また、大学では、授業中の学生の様子を評価することはほとんどせず、テストやレポートなど、学習成果を可視化する場を設けて評価します。評価規準だけを作り込んで、それを日々の学習場面に持ち込むのではなく、目指す子どもの姿が最も表れる「見せ場」を設けて評価するとよいでしょう。

——「見せ場」とは、具体的にどのような場面でしょうか。

石井 体育祭や文化祭等の行事をイメージするとよいでしょう。それらは、子どもの活動の成果や成長を総合的に表現する絶好の「見せ場」です。ペーパーテストも「見せ場」として

位置づけられますが、無味乾燥です。技能教科では作品の制作と発表は豊かな「見せ場」になりますし、国語では新聞作りや書籍の帯の作成といった単元を貫く言語活動が挙げられます（知識・技能を総合的に使いこなすパフォーマンス課題）。文部科学省「全国学力・学習状況調査」のB問題、教科書の演習問題なども、作問や評価課題づくりのヒントになります。

梅津 前任校では、2019年度から、6年生の「総合的な学習の時間」で、地域の商店街と連携し、1グループが1店舗を担当して、店の特徴を生かした商店街のイベントの企画・運営を行う地域活性化活動を始めました。目指す子ども像の実現に向けて全教員で話し合っ7つの資質・能力を設定し、それらの育成を意識して行ってきた教科学習や特別活動の成果なども合わせて、試す場となっています。

石井 「見せ場」には、作品を学校の玄関に展示したり、地域で発表したりするなど、観客がいることも重要です。梅津主幹の前任校の活動では、授業での学びを生かし、商店街の活性化という自分にも深く関係のある課題に取り組み、商店街の人や来店者に成果を評価されます。子どもは真剣に取り組みますし、それだけに評価も真摯に受け止められるでしょう。たとえ失敗しても、次の学習に生かせる手応えを得られます。そうした未来につながる評価とすることが大事です。

梅津 その視点は、カリキュラム・マネジメントを行う上でとても重要で

図3 授業における、情意領域の形成的評価の考え方

授業構成		情意の中身		評価における位置づけ
導入	<ul style="list-style-type: none"> めあての提示 課題設定 	入口の情意 (学習内容への興味・関心・意欲など)	学習を支えるもの	授業の展開を調整するための手がかりとなる子どもの様子であり、指導改善に生かすために行う評価
展開	<ul style="list-style-type: none"> 活動 課題解決 	情意の変容		
まとめ・振り返り	<ul style="list-style-type: none"> 学習内容のまとめ 自己評価・他者評価 	出口の情意 (知的態度、思考の学習習慣、科学的教養に裏づけられた倫理・価値観など)	その後の学習を方向づけるもの	授業を通して子どもの中に起きた価値ある変化であり、目標として掲げうるもの

情意については、「目標に掲げても評定せず」が原則となる。総括的評価の材料としては、単元単位のパフォーマンス課題などに取り組む中で、思考・判断・表現とセットで評価することが望まれる。

*石井准教授提供資料・取材を基に編集部で作成。

す。地域の人たちに本校で学んだ子どもの姿を見てもらうことで、本校の教育活動への理解を得る機会になり、次の連携にもつながっています。

石井 なお、グループ活動の評価では、一人ひとりが振り返りを書く機会を設けるなど、個々の思考を記録しておくことが必要です。それをグループ活動の成果と照らし合わせることで、一人ひとりを評価できます。ほかにも、レポートや面談で、グループ活動の経験が自身の成長にどう生きているのかを述べさせる方法も、個人の評価には有効です。

森田 振り返りは、自身の成長と課題を認識するために必要であり、地道に続けることが重要だと考えます。ICTを活用すれば、そうした振り返りの蓄積も容易になります。発達段階に応じて、子ども自身が自らの学びをメタ認知し、次の学習につながるように、私たち教員が支援していきたいものです。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価

入口の関心・意欲ではなく出口の情意を評価する

森田 資質・能力の3つの柱に合わせて3観点評価となったこと自体には違和感が少なく、「知識・技能」と「思考・判断・表現」の観点については現場の混乱はあまりなさそうです。ただ、「主体的に学習に取り組む態度」がイメージしにくく、本時の授業だけでなく、次の授業や将来に向けた態度も評価対象とされた点についても、評価のしづらさを感じています。

石井 情意領域である「関心・意欲・態度」は、目に見えにくいことから、多くの場合、挙手回数やノート、提出物などで評価していたために、目標と評価が一致していない状況でした。

情意の中身には、入口と出口があります。入口の情意とは、学習内容への関心や意欲であり、教員が授業をしながら確かめて、授業展開の調整に活用するものです。そのため、成績として評定すべきではないと考えます。一方、出口の情意とは、学び続けようとする意志や批判的に思考する態度等のことで、学習を通して子どもに根づく価値観です。その後の学習を方向づけるものであり、目標として評価対象となり得ます。日々の授業で出口の情意を形成的に評価し、意識的に育て



挑戦的な「見せ場」を設けて、学びを総合化させるとともに、未来に広がりのある評価に。

京都大学大学院 准教授 **石井英真**



保護者面談で 子どもの様子や次の目標を 保護者と共有し、 同じ目線で子どもを支援する。

千葉県教育庁 主幹 梅津健志

つつ（図3）、総括的評価については、「見せ場」（パフォーマンス課題）やそれに向けた活動のプロセスを通して、思考・判断・表現とセットで情意面の育ちも見えていくとよいでしょう。

森田 授業中の子どもの姿を一面的に見取るのではなく、次時以降の学びのために評価するのだという、教員の発想の転換が必要なのだと改めて思います。

保護者への説明

子どもの成長を共有し 喜び合える関係を築く

梅津 学習評価の趣旨を、保護者に改めて説明することも重要です。通知表は、子どもの学習の「査定」だと捉える保護者が少なくないからです。

石井 保護者にとって子どもの成長を感じられる場が通知表に限定されていると、その評価基準や記述内容の根拠に対して敏感になるのは当然のことです。保護者が最も納得するエビデンスは、我が子の姿そのものですから、通知表以外の場面で子どもの成長や課題を実感できれば、数値ではない評価規準も納得できるのではないのでしょうか。子どもの成長を、本人や保護者と共有する場をできるだけ多く設ける工夫が大切です。

梅津 対面以外で子どもの様子を発信する有効な手段は、ウェブサイトだと思います。前任校では、ブログに教育活動を紹介する際、必ず活動の目標も書きました。何の力をつけるために

活動し、その結果、どんな子どもの姿が見られたかを紹介し、課題があればそれも併せて発信したところ、アクセス数は月平均1万件以上と飛躍的に増えました。そして、ブログを見た保護者や地域の人たちが本校の目指す子ども像を理解し、教育活動に積極的に協力してくれるようになりました。

石井 普段から保護者と子どもの姿を共有し、その成長を喜び合える関係を築けば、教育活動の透明度が上がり、信頼性の向上につながります。保護者との連絡機能である学校通信や授業参観、面談、家庭訪問、通知表などを、保護者との信頼関係を築く手段として捉え、学校全体で一貫性を持って活用したいものです。

梅津 通知表の形は校長裁量で決められるため、前任校では、1学期末の通知表の総合所見によい点を1つ書き、詳しくは面談で保護者に直接伝える形式にしました。子どもの状況と次の学期末までの目標を保護者と共有し、教員と保護者が同じ目線で子どもを支援できる態勢にしたのです。働き方改革の一環として、家庭訪問や保護者面談の回数を減らす学校があ

ると聞きますが、働き方改革の目的は授業の充実にあります。保護者との信頼関係を築くための活動の削減は、慎重に検討すべきだと考えます。

2020年度の全面実施に向けて

学校教育目標を策定し 全教員で共有

——学校や教育委員会は、全面実施までに何を行えばよいでしょうか。

森田 年度末までに学校がすべきことは、学校のグランドデザインを策定し、全体で共有して、教員が学校教育目標を教科や学年の目標に落とし込み、その達成を目指した授業づくりができるようにすることです。本校では、教員にも子どもにも分かりやすいよう、学校教育目標を1つに絞り、明確な言葉で表しています。また、学校は日々の活動に精いっぱいなことが多いので、教育委員会が、グランドデザインの策定や目標を基にした指導改善と評価の重要性を粘り強く伝え、支援することが重要でしょう。

石井 子どもの姿を具体的に思い描きながら目標・指導・評価を考えていけば、子どもは必ず変わります。新しい活動をする必要はなく、普段の教育活動一つひとつを何のために行っているのか、それが子どもの学びにどうつながっているのかを意識しながら次年度の計画を立て、評価すること自体が目的になっていないかを、新年度を迎えるまでに今一度、学校全体で振り返ってみるとよいでしょう。

先生方が教科・単元の目標を 子どもの姿で落とし込めるよう、 学校教育目標はシンプルに。

古河市立総和南中学校 校長 森田泰司

